

氏名	工藤 泰三		
学位の種類	博士(英語学)		
学位記番号	甲第18号		
学位授与年月日	2024年3月20日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当(課程博士)		
学位論文題目	Integrating Global Citizenship Education and Language Learning Based on the Approach of Content and Language Integrated Learning(CLIL)		
論文審査委員	委員	教授	柳 善和
	委員	教授	城 哲哉
	外部審査委員		深澤 清治
	外部審査委員		築道 和明

論文の概要

工藤泰三氏による本論文は、「Integrating Global Citizenship Education and Language Learning Based on the Approach Of Content and Language Integrated Learning (CLIL)(地球市民性の教育と内容言語統合型学習の統合)」をタイトルとし、CLIL をもとにしたアプローチが英語能力の向上に役立つか、同アプローチが日本人大学生の地球市民性を向上させるか、についての効果を量的、そしてインタビューを通じた質的調査により明らかにしようとする試みである。

研究の課題として、以下の3点が挙げられている。

- (1) CLIL を用いた地球的課題を扱う英語の授業は、日本の大学生の英語能力を向上に有効か。
- (2) CLIL を用いた地球的課題を扱う英語の授業は、日本の大学生の「地球市民性(global citizenship)」の向上に有効か。
- (3) CLIL を用いた地球的課題を扱う英語の授業を受講する日本の大学生の心的状況(mindset)はどのようなものか。具体的には、受講理由には何があり、受講して何を感じ、考えたか。

これらの課題の成果の検証は、工藤氏が担当した2科目の授業を受講した学生を対象に、受講前後の変容を比較することで実施している。(1)については、英語能力テスト(CASEC)、(2)についてはグローバル教育の成果測定を目的に開発された石森(2013)によるアセ

メント法、(3)については受講した学生のうち4名を取り出して、半構造化インタビューによる聞き取りを行っている。

結果として、上記の3点の課題に対して、以下の3点が挙げられている。

(1) 英語能力については、通常の英語授業(non-CLIL class)を受講したクラスと比較して、有意であるとは言えなかった(むしろ non-CLIL classの方がよい結果の場合もあった)。

この点については、授業を通じて英語全般についての要素が十分に盛り込まれていなかったのではないか、また、この内容の授業での成果としての英語能力を CASECで測定しようと試みたことに無理があったのではないか、という2点が論じられていた。

(2) については、アセスメントの項目によっては変動幅に大小があるにしても、全般的には肯定的変容が見られた。

この点については、アセスメントの項目によって変動幅に大小があったことは、教室での活動の限界や自己効力感の欠如が原因ではないかということも論じられた。

(3)については、地球的課題への意識の高まり、共感・想像力、社会情動的スキルの向上が学生たちの発言から読み取れることを明らかにしている。

最終章において、(1)英語能力の変容が見られなかった、(2)しかしながら、本研究における CLIL 実践は地球的課題(global citizenship)の向上には効果が見られた、(3)さらに、学生への聞き取り調査からは、①足場かけの充実を含む言語学習面への焦点、②成功体験による自己効力感の必要性、CALP(Cognitive Academic Language Proficiency)の発達に重点を置く必要性、社会情動的スキルについての研究、等が将来の実践研究のヒントとして考えられるとしている。

論文の評価

本論文は、大学英語教育において CLIL(内容言語統合型学習)を導入し、CLIL をもとにしたアプローチが英語能力の向上に役立つか、同アプローチが日本人大学生の地球的課題(global citizenship)を向上させるか、についての効果を量的、そしてインタビューを通じた質的調査により明らかにしようとする試みであった。これまでの CLIL に関する研究が、概念整理や指導・活動のモデルを示したものが多い中、その効果について実証的に明らかにしようとした意欲的な研究であり、SDGs の提唱する質の高い教育を実践するために重要な示唆となることが期待される。

特に、次の3点について評価されるべきであろう

(1) 英語教育を単なる言語技能養成にとどまらず、生涯教育の一環として地球市民としての多文化意識の醸成に資するべきであるという工藤氏の主張が根底にある。

(2) 従来の CLIL の実践は言語以外の教科を教えることが一般的だったが、地球市民教育

と合わせて重要な社会的課題を指導内容としていること。

- (3) 研究手法について、数量的な方法とともに、半構造化インタビューによる詳細な質的分析を行って、より信頼性の高いデータ収集・分析となっている。

一方で論文の内容として、以下のような点も今後考察されるべきであろう。

- (1) 学習対象として、**global citizenship education** を取り上げているが、学習対象として選択した理由が明らかにされていない。例えば、理数科目を外国語(この場合は英語)を介して学ぶという設定にしなかったのはなぜなのか。
- (2) 研究手段として(実行するには難しい面もあるが)、統制群を設定しなかったのはなぜなのか。
- (3) 本研究の中で授業実践として内容(**content**)と言語(**language**)をどう組み合わせたのかが、明確に説明してほしい。

以上の点を総合的に考慮して、審査委員会は工藤泰三氏によって書かれた本論文に対して博士号を授与することが適当であると判断した。